

京都大学理学研究科は、数学・数理解析、物理学・宇宙物理学、地球惑星科学、化学、生物科学の5つの専攻からなり、その歴史の中で、複数のノーベル賞やフィールズ賞などの大きな賞を授与される研究者が多数輩出するなど、各分野で国内外トップレベルの研究業績を挙げて来ました。また科学・技術の分野を中心に、数多くの多彩な人材を育成し、我が国の理学分野の教育にも大きな貢献を果たして来ました。近年は「数理を基盤として新分野の自発的創出を促す理学教育プログラム」（通称：MACS教育プログラム）のような学際融合分野の開拓の試みなど、新たな理学の研究と教育の実施にも力を注ぎ、その機能を担う仕組みとして、2019年度より附属サイエンス連携探索センター（通称：SACRA）を設置いたしました。今年3月末には、MACS教育プログラムの活動を「京大式サイエンスの創り方（京大出版会）」にまとめて刊行いたしましたので、ぜひご一読いただければ幸いです。

理学は、自然現象に関する真理の探究を行うもので、自然や事物の本質について自由かつ大胆に考えを巡らし、その真理を合理的に明らかにすることを目指す学問です。世界の有様を大きく変えるような科学上の発見の多くは、自然界の真理に対する純粋な好奇心に基づく研究から生まれてきました。京都大学理学研究科の教員は皆、事物の本性や本質を見つけることに無常の喜びと幸せを感じていると思います。このような、好奇心旺盛で個性的かつ多才多様な教員陣こそが、本研究科の最も誇りとするものです。

近年、我が国では、イノベーションの名の下に、社会に役立つ研究が求められる傾向が強くなっているように思われます。もちろん私たちも、自分の研究が世の中の役に立つことを願っていますし、国民の税金によって行う研究に対しての、しっかりした説明と成果の発信をすることも重要です。しかしその一方で、出口を目指した短期的・局所的な視点だけでは、本当に社会を大きく変えるような発見は難しい場合も少なくありません。歴史を振り返ると、大きなブレークスルーにつながる研究や発明の多くは、物事の本質に迫ろうとする知的な好奇心と、それに支えられた深い洞察や大胆な発想の転換から生まれてきていることがよく見て取れます。また、そのような試みを行える気持ちの余裕と「遊び心」も必要です。京都大学の理学研究科では、自然界の現象や事実无心で向き合い、物事の本質を見極める努力を、教員・学生が協力しながら進めていく場であり続けたいと考えております。



令和4年5月  
理学研究科長・理学部長 國府 寛司

